学生海外調査研究		
ニジンスキーとその振付作品に関する一次資料の収集		
氏名　佐藤　真知子		比較社会文化学専攻
期間	2016 年 9 月 7 日 ～ 2016 年 9 月 19 日	
場所	アメリカ合衆国（ボストン、ニューヨーク）	
施設	ハーバード大学 ホートン図書館、ニューヨーク公立図書館 リンカーン・センター内上演芸術資料館	

内容報告

1. 研究概要

1.1 これまでの研究

筆者は、20 世紀初頭にフランス・パリを中心に活躍したロシア人のダンサー・振付家である、ヴァーツラフ・ニジンスキー［Vaslav Nijinsky 1889-1950］について、研究を行なっている。ニジンスキーは、「驚異的な技巧」や「舞台でのエキゾティックなカリスマ性」を持ち、クラシック・バレエの花形男性舞踊手として、デビュー当初から名声を誇っていたとされる。その一方、ニジンスキーの振付作品は、クラシック・バレエの伝統から大きく外れるような動きを採用し、当時の観客に賛否両論の大騒動を巻き起こしたとして有名である[1]。

筆者はこれまで、ニジンスキーが手がけた第三作目の振付作品《春の祭典［Le Sacre du printemps］》(1913) について、主にフランス国会図書館が公開しているデジタル・アーカイブを用いて、初演時のフランスの新聞・雑誌記事による、評価の分析を行ってきた[2]。これまで、ニジンスキー振付作品についての批評文を網羅的に検討した例は、管見の限りブラードの論文のみであると思われる（Bullard 1971）[3]。筆者はブラードの研究に対して十数件の評論を追加し、分析を試みたのであるが、この作品にはかなりの反響があったという事実が具体的に確認できたことに加え、その内容についても定量的に分析した結果を示すことができた。そしてその研究を通して、筆者はニジンスキーがなぜこのような振付を行ったのか、すなわち、ニジンスキーはどのような舞踊観を持っていたのかについて、関心を持つに至っている。

1.2 現在の研究計画

ニジンスキーの振付に関する考えについて調べてみると、興味深い点がある。ニジンスキーがその手記において、「舞踊の理論を作り上げた」（鈴木訳 1999, p.222）[4]と述べる点である。乗越が述べるように、舞踊において「テクニックの確立–つまり自らのスタイルを理論として大系化することは至難の業」であるとされる（乗越 2016）[5]。クラシック・バレエは、その形式が体系化し、発展してきた舞踊の一つであるが、ニジンスキーはクラシック・バレエの名手と言われながら、その伝統を打ち破り、新しい舞踊へ昇華するような探究を試みたことが示されるのである。

ニジンスキーが確立したという舞踊の理論とは何であったのか、ニジンスキーの舞踊観とは、どんなものであったのか。このテーマについては、近年、ニジンスキーの振付作品についての注目も高まり、ニジンスキーの手記も度々出版されているにも関わらず、世界的に見ても先行研究がほとんどない状態にある。そのため、筆者は博士論文にて、ニジンスキー自身の遺した手稿や言説、振付作品の分析を通して、彼の舞踊の理論、ひいては彼の舞踊観に迫り、それが舞踊史上にどのように位置付けられるのかについて、検討したいと考えている。

2. 本海外調査研究の必要性と目的

以上に述べた研究計画において、ニジンスキーの舞踊理論という問いに迫るには、彼が振付を手がけた 4 作品、《牧神の午後［L'Après-midi d'un Faune］》(1912) 、《遊戯［Jeux］》(1913)、《春の祭典》(1913)、《ティル・オイレンシュピーゲル［Till Eulenspiegel］》(1916) それぞれに関する資料、並びにニジンスキー自身が遺した資料等を収集し、分析することが必要不可欠であった。

本海外調査研究では、博士論文の基盤となる一次資料の収集を、最大の目的とした。具体的には、以下に記す資料の閲覧と収集を行なうこととした。

（1） ニジンスキー本人に関するもの：手記の原典、手紙、電報、新聞・雑誌記事、写真等
（2） ニジンスキーの振付作品に関するもの：新聞・雑誌記事、写真、楽譜等
（3） ニジンスキーが活躍した、ディアギレフのバレエ・リュス［Les Ballets Russes de Sergei Dyaghilev 1909-1929］[6] に関するもの：初期（1909-1914 くらいまで）の公演プログラム、新聞・雑誌記事、写真等

なお、ニジンスキーやディアギレフのバレエ・リュス（以下、バレエ・リュス）に関する一次資料は、イギリスやフランス、アメリカをはじめ、世界各国に所蔵している機関があることを確認している。今回は、その中でも特に豊富にコレクションを所蔵していると思われる、アメリカの機関へ訪問することとした。資料はインターネットでの公開をしておらず、メモ書きや電報、勘定書といった細かな資料も含まれるため、現地に赴いて調査を行う必要があった。

3. 調査の内容と成果

3.1 ハーバード大学ホートン図書館における、ストラヴィンスキー＝ディアギレフ財団（パルメニア・エクストローム）のコレクションの閲覧（ボストン）

3.1.1 コレクションの概要

ストラヴィンスキー＝ディアギレフ財団は、バレエ史研究家で著述家であった、パルメニア・エクストローム［Parmenia Ekstrom 1908-1989］が 1950 年代後半に、ニューヨークで設立した財団である。この財団は、バレエ・リュスに関連する、膨大なコレクションを所蔵している。特に、舞踊手や音楽家、画家など、バレエ・リュスに関わった芸術家らについて、財団がまとめたリサーチ・ファイルは貴重である。

図 1. アメリカ合衆国の地図（調査に赴いたボストンとニューヨークは、東海岸北部に位置している）

今回は、ニジンスキー振付作品（全 4 作品）、及びそれに関わった芸術家らについてのリサーチ・ファイルを中心に、調査を行った。調査方法は、事前にコレクション内容から調査リストを作成しておき、現地にて閲覧申請をする方法をとった。また、資料はフラッシュ等の特殊な光を当てることは禁止であったが、手持ちによるカメラ撮影は許可された。

なお、ストラヴィンスキー＝ディアギレフ財団は元来、ニューヨーク・マンハッタン（エクストロームの自宅）に存在していたのであるが、彼女の死後、それらのコレクションはハーバード大学が引受け、大学内のシアター・コレクションにて保管を行っている。以下に、財団のまとめたリサーチ・ファイルの項目に従い、主な調査内容とその成果を記した。

3.1.2 Artists（詩人、画家等）について

(1)ジャン・コクトー［Jean Cocteau 1889-1963］、(2)ニコラス・レーリヒ［Nicholas Roerich 1874-1947］についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)ジャン・コクトー：フランスの詩人・作家・デザイナーなど多くの顔を持ち、バレエ・リュスの活動にも深く関わっている。ニジンスキーとのつながりについて言えば、ステファヌ・マラルメ［Stéphane Mallarmé 1842-1898］の詩《半獣神の午後［L'Après-midi d'un Faune］》をニジンスキーに紹介し、バレエ《牧神の午後》の完成につながったという見方もある [7]。ホートン図書館における調査では、コクトー没後の 1989 年に開催された展覧会のチラシ、オークション・カタログの切抜き 47 件、コクトー直筆の手紙の写し 5 件、ディアギレフからコクトー宛の手紙 1 件、ドローイングの写し 6 件（オークション・カタログに掲載されていないものに限った）、コクトー自身の写真 1 件、新聞・雑誌記事 7 件（内コクトーが書いたと思われる記事 3 件）等を得ることができた。

(2)ニコラス・レーリヒ：ニジンスキー振付《春の祭典》等の台本、美術、衣装に携わったロシアの芸術家である。ロシアの古代文明や東洋神秘思想に造詣が深かったと言われている [8]。今回は、レーリヒの描いた絵画の写し 10 件、レーリヒの書いた「Realm of Light」の文章の写し、オークション・カタログ、エクストロームによるレーリヒ略歴についてのメモ等を収集した。

3.1.3 Composers（作曲家）について

(1)クロード・ドビュッシー［Claude Debussy 1862-1918］、(2)イゴール・ストラヴィンスキー［Igor Stravinsky 1882-1971］についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)クロード・ドビュッシー：ニジンスキー振付《牧神の午後》、および《遊戯》に曲を提供している。調査では、オークション・カタログの写し 4 件（内 3 件が直筆の手紙、1 件が手書きのスコア）、本人が寄稿した雑誌記事の写し 2 件等を得た。

(2)イゴール・ストラヴィンスキー：ニジンスキー振付《春の祭典》等、バレエ・リュスの代表的な作品について、作曲を行った。本人の写真の写し 12 件、直筆の手紙の写し 3 件、新聞・雑誌記事 14 件（内本人の寄稿文は 5 件）等を複写することができた。

3.1.4 Conductors（指揮者）について

(1)ピエール・モントゥー[Pierre Monteux 1875-1964]についての、リサーチ・ファイルを参照した。ピエール・モントゥー：フランスの指揮者であるが、バレエ・リュスの初期に、首席指揮者として上演に携わっている。《春の祭典》における騒動の様子など、モントゥーのものと思われる証言は、よく引用される。今回は、本人の写真とイラストレーションを各 1 件、モントゥーに関する論考を 1 件、複写を行った。

3.1.5 Productions（作品）について

(1)《牧神の午後》、(2)《遊戯》、(3)《春の祭典》、(4)《ティル・オイレンシュピーゲル》についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)《牧神の午後》については、写真家アドルフ・ドゥ・メイヤー[Adolf de Meyer] による写真 33 件を掲載した冊子、雑誌等に掲載された図版の写し等を得た。

(2)《遊戯》については、ドビュッシーによる手書きの楽譜と手紙が掲載された、オークション・カタログ、写真 2 件、挿絵 4 件等の複写を行なった。

(3)《春の祭典》に関しては、1913 年と 1914 年に発行されたロシアの新聞記事 5 件、ヴァランティーヌ・グロス [Valentine Gross] の手稿と、財団がタイプ化した書き起こし原稿、1930 年のマーサ・グラハムによる《春の祭典》のプログラム等を閲覧した。この中でも、特に《春の祭典》初演時のロシアでの記事は、まだ調査を行なっていなかったため、複写を得られたことは幸運であった（ただし、原本の印刷の状態があまり鮮明ではないこともあり、解読には時間がかかることが予想される）。また、グロスの手稿についても、早速分析に取り掛かりたいと考えている。

(4)《ティル・オイレンシュピーゲル》に関しては、挿絵の写しを数点と、オークション・カタログの閲覧・複写を行なった。

3.1.6 Diaghilev and his associates（ディアギレフと仲間たち）について

(1)セルゲイ・ディアギレフ[Sergei Diaghilev 1872-1929]、(2)ココ・シャネル[Coco Chanel 1883-1971]、(3)ミシア・セール[Misia Sert 1872-1950] 、(4)ガブリエル・アストリュク[Gabriel Astruc 1864-1938]、(5)ボリス・コフノ[Boris Kochno 1904-1990] についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1) セルゲイ・ディアギレフ：バレエ・リュスの興行師であった人物である。本調査では、ディアギレフについて 1970～80 年代に書かれた新聞・雑誌記事、ディアギレフの通称「黒い手帳」に関する論文、1929 年のディアギレフの死を知らせる新聞記事 7 件、直筆の手紙等が掲載された、オークション・カタログ等について、閲覧・複写を行なった。

(2)ココ・シャネル：服飾ブランドのシャネルのデザイナーとしても知られる女性であるが、(3)ミシア・セールとともに、バレエ・リュスのパトロンであった女性である。(2)シャネルについては、彼女がモデルとなった絵画の写し 2 件、新聞記事 2 件について、複写を行なった。(3)ミシアについては、ディアギレフとの手紙 3 件が掲載されたオークション・カタログを閲覧した。

(4)ガブリエル・アストリュク：西ヨーロッパにロシアのバレエやオペラを持ち込む興行師として、ディアギレフと組んで活動を行なったフランス人である。ディアギレフとの手紙が掲載された、オークション・カタログを閲覧した。

(5)ボリス・コフノ：ディアギレフの秘書的な役割をも担った、ロシアの詩人・台本作家である。エクストロームによる略歴のメモ、新聞・雑誌記事、素描等について、複写を行なった。

3.1.7 Performers-Diaghilev's company（ディアギレフのカンパニーのダンサー）について

(1)エンリコ・チェケッティ[Enrico Cecchetti 1850-1928]、(2)ミハイル・フォーキン[Michel Fokine 1880-1942]、(3)ブロニスラヴァ・ニジンスカ[Bronislava Nijinska 1891-1972]、(4)ヴァーツラフ・ニジンスキーについての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)エンリコ・チェケッティ：特にバレエ教師として、バレエ・リュスに携わった人物であることで知られる。彼の生い立ちや業績等をまとめた記事について、複写を行なった。

(2)ミハイル・フォーキン：バレエ・リュスで活躍したダンサーであり、振付家である。しばしば作品や舞踊観をニジンスキーと比較して語られることも多い。今回は、新聞・雑誌記事 5 件の複写を行なった。

(3)ブロニスラヴァ・ニジンスカ：ニジンスキーの妹であり、バレエ・リュスで活躍したダンサー・振付家である。1932 年の公演プログラムと関連記事、《結婚［Les Noces]》(1923）の直筆スケッチの写し、本人の写真、1986 年に開催された展覧会「La Nijinska: A Dancer's Legacy」(Cooper Hewitt Museum, 1986）のカタログ等を閲覧した。

(4)ニジンスキーについては、1913 年に発行されたとみられる本人の寄稿と、財団による英訳原稿、様々な年代の新聞記事（オークションにおける「手記」落札の記事も数件含む)、ニジンスキーの素描についてのオークション・カタログ等を閲覧した。

3.2 ニューヨーク公立図書館 リンカーン・センター内上演芸術資料館における、資料の収集と閲覧（ニューヨーク）

3.2.1 コレクションの概要

ニューヨーク公立図書館のジェローム・ロビンズ ダンス部門は、1944 年にニューヨーク公立図書館の独立した部門として設立された、世界最大規模のアーカイブである。この機関が所蔵する資料は、動画記録、オーディオテープ、プログラムファイル、原稿等、様々である。

この機関についても、事前にコレクション内容から調査リストを作成しておき、現地で配布されている申請用紙にて、資料請求を行うという方法をとった。また、資料はフラッシュ等を使用することは禁止であったが、手持ちによるカメラ撮影は許可された。また、マイクロフィルムについては、表示画面をデータで書き出せる機器と、旧式の映写機のような機器の 2 種類を使用した。

特に今回は、ダンス部門の中でもスペシャル・コレクションに分類される、数多くの貴重な資料について、閲覧・複写をすることができた。以下に、主な調査内容とその成果を記した。

3.2.2 「ニジンスキーの手記」原典の複写

「ニジンスキーの手記（Diary, 1918-1919.)」[9]は、計 4 冊のノートから成る（なお文章はニジンスキーの直筆で、ロシア語にて綴られている)。そのノートの 1～3 冊目までを、ニューヨーク公立図書館が所蔵しており、今回はマイクロフィルムにおける閲覧が叶った。なお、4 冊目のノートは、フランス国会図書館が所蔵しているとのことで、今後調査が必要である。

『完全版 ニジンスキーの手記』の解説で詳しく述べられているように、このニジンスキーの手記は、これまで度々翻訳され出版されてきた（鈴木訳 1999, pp.387-388）[10]。まずニジンスキー夫人である、ロモラ・ニジンスキーが、原典から 3 分の 1 ほど内容を削除したものを、1936 年に英語訳版にて出版している [11]。そして 1995 年に、省かれた部分を補完した手記の全編が仏語訳版にて出版 [12]、1999 年には邦訳版が出版されたという流れである [13]。

今回筆者が原典を閲覧しようと思ったのは、ニジンスキーが確立したと述べる「舞踊の理論」につながるヒントを得たいと思ったからである。これまで出版されてきた書籍には、「舞踊の理論」につながる具体的な内容についてはうかがい知ることができなかった。しかしながら原典を見てみると、文字の他に、図や楽譜のようなものが記されており、これらについて研究された例は管見の限りなさそうである。この資料については、複写をすることができたため、今後内容を検討していきたい。

3.2.3 ガブリエル・アストリュクが遺した資料の複写

バレエ・リュスの初期の公演に対する協力を行なった、フランス側の興行師ガブリエル・アストリュクが遺した資料について、マイクロフィルムでの閲覧が叶った。

ディアギレフをはじめとするバレエ・リュス関係者とやり取りを行なった電報や手紙、メモ、勘定書、プログラムの写し、新聞記事の切り抜きといった、計 1,300 点の資料が、2 本のマイクロフィルムに収められていた。資料の大部分は、1906～1914 年のもので、年代別、宛先別に分類がなされていた。内容は、ディアギレフとのやり取りが最多であるが、ストラヴィンスキーやニジンスキーとの電報も見受けられた。これにより、初期のバレエ・リュスの活動の一端が見えてくることを期待している。あまりに点数が多く、時間の関係上、2 本目のマイクロフィルムの後半、新聞記事のスクラップ等の複写を断念せざるを得なかった。またの機会に複写を行いたいと考えている。

3.2.4 ニジンスキーと、その振付作品に関する写真・図版の複写

(1)ニジンスキー本人の写真、(2)ニジンスキー振付作品に関する写真について、複写を行なった。

(1)については、幼少期から壮年期までの、ニジンスキー本人の写真について、閲覧・複写を行なった。珍しいものとしては、壮年期のニジンスキーの写真をまとめた、革張りのスクラップ・ブックがあり、舞台から引退した後のニジンスキーの様子をうかがい知ることができた。

(2)ニジンスキー振付作品関連図版については、全 4 作品について、かなりの数の写真、および図版の閲覧・複写を行うことができた。しかしながら時間の関係上、今回閲覧が叶ったのは、本図書館が所蔵するコレクションの一部に留まることとなった。引き続き調査を行いたいと考えている。

3.2.5 その他の資料

(1)ストラヴィンスキーによる《春の祭典》のスケッチについて、閲覧・複写を行なった。これは本人の直筆（鉛筆書き）による、楽譜やメモ書きがなされている大判のスケッチブックである。ストラヴィンスキーは《春の祭典》のスコアについて、何度も修正を行っているのであるが、本スケッチは1911～1913 年のものであることからも、主に 1913 年の初演に向けた制作のスケッチであったことがわかる。どのような推敲を経て作品が出来上がったのか、今後読み解いていきたい。

4. 今後の研究に向けて

以上のように、本調査は移動日を除いて計 10 日間という短期間で、2 都市を巡るというものであったが、大変有意義な調査となった。

本調査は、「ニジンスキーとその振付作品に関する一次資料の収集」という目的で行ったものであったが、写真や電報、新聞・雑誌記事等の資料について、相当数の複写を得ることができ、目的は達成できたと考えている。特にニジンスキーの手記の原典を閲覧でき、複写も叶ったことは、彼の舞踊観を探る上で、非常に重要な資料となるであろう。しかしながら今回は時間の関係上、悔しくも調査を断念せざるを得なかった資料が、多く存在する。近い将来、今回訪れた機関への再訪を実現し、調査を継続していきたい。同時に、今回得られた資料を詳細に読み込み、分析することで、ニジンスキーの舞踊観について迫っていきたいと考えている。

本研究は、時代や地域によって少しずつ様子を変え、発展を続けているバレエという舞踊ジャンルにおいて、いわば「近代」のバレエの原点を探ろうとするものである。バレエは、20 世紀初頭のバレエ・リュスの出現によって、新たな幕が開かれたと言っても過言ではない。ニジンスキーの舞踊観について考察することは、「近代」バレエの幕開けの時期に活躍した一人の芸術家が、舞踊をどのように見ていたのかを考察することと同義である。また、過去の舞踊作品を深く分析することは、日本をはじめ、世界的な規模で広がりを見せる、バレエの本質的な理解と発展に貢献できると思われる。その意味でも、本調査はグローバルな視点で舞踊学の推進に寄与する可能性があるという点で、国際的な女性リーダーの育成に関わるプログラムの一環としての調査となったのではないかと考えている。

本調査で得られた知見は、筆者の博士論文のおそらく第 1 章、第 2 章に関わるであろう。また、本調査の成果の一部を論文にまとめ、「ニジンスキーの舞踊観（仮）」という題目で、お茶の水女子大学人文科学論叢への投稿を予定している。また内容をさらに進展させ、来年度の舞踊学会にて口頭発表を行いたいと考えている。

注

1. ここで紹介するニジンスキーの概要については、以下の事典を参照した。
   Craine, D. & Mackrell, J. (2004) *Oxford Dictionary of Dance*, Oxford University Press. (鈴木晶監訳（2010)『オックスフォード バレエ・ダンス事典』平凡社, 354-355.）なお本報告書にて、人名や作品名等について記載のあるものは、この事典の表記に従った。
2. この論文は、バレエ《春の祭典》（1913）が初演されたフランスにおいて、当時どのような評価がなされたかについて考察したものである。拙稿（2016)『ニジンスキー《春の祭典》の受容とその評価』お茶の水女子大学修士論文
3. Bullard, T. (1971) *The first performance of Igor Stravinsky's Le sacre du printemps*, Eastman School of Music of the University of Rochester.
4. 鈴木晶訳（1999)『ニジンスキーの手記 完全版』新書館.
5. 乗越たかお（2016)「コンテンポラリーダンスに、テクニックはあるのか？」『ダンスマガジン 2016 年 4 月号』新書館, 49.
6. ロシアのバレエを西ヨーロッパに紹介するために、ロシア人の興行師ディアギレフにより結成されたバレエ団。バレエ・リュスとは、フランス語でロシア・バレエを意味する。一流の美術家、音楽家、ダンサーらを集結させて作品制作を行い、一世を風靡するとともに、世界的なバレエ・ブームの火付け役となった。
7. Nectoux, J. (1989) *L'Après-midi d'un Faune: Mallarmé, Debussy, Nijinsky*, Conservateur au musée d'Orsay, Réunion des musées nationaux, 17. (柏倉康夫訳 オルセー美術館編（1994）「Ⅳ ニジンスキーの牧神」『牧神の午後　マラルメ・ドビュッシー・ニジンスキー』平凡社, 28.）
8. ニコラス・レーリヒの活動とその生涯については、以下の文献に詳しい。
   Decter, J. (1997) *Messenger of Beauty: The Life and Visionary Art of Nicholas Roerich*, Park Street Press.
   加藤九祚（1982)『ヒマラヤに魅せられたひと ニコライ・レーリヒの生涯』人文書院.
9. 内容を読んでみると、このニジンスキーの記したノートは、日記の形式をとっていないことが分かる。ニューヨーク公立図書館のアーカイブでは、このノートを”Diary, 1918-1919.”として紹介しているが、邦訳にあたっては鈴木

訳『ニジンスキーの手記 完全版』の題目に倣い、本報告書においても「ニジンスキーの手記」と記した。
10. 鈴木訳, 前掲 4.
11. まず 1936 年にアメリカにて、次いで 1937 年にイギリスにて出版された。それぞれの文献は、以下の通りである。
Nijinsky, V. (1936) *The Diary of Vaslav Nijinsky*, Ed. Nijinsky, R., Simon and Schuster.
Nijinsky, R. (1937) *Nijinsky*, Victor Gollancz Ltd.
12. Nijinsky, V. (1995) *Cahiers-Le sentiment,* traduit du russe par Dumais-Lvowski, C. et Pogojeva, G., Actes Sud.
13. 鈴木訳, 前掲 4.

参考文献

国立新美術館, TBS テレビ編（2014)『魅惑のコスチューム：バレエ・リュス展』図録, TBS テレビ.
鈴木晶（1994)『踊る世紀』新書館.
―（1988)『ニジンスキー 神の道化』新書館.
藤野幸雄（1982)『春の祭典　ロシア・バレー団の人々』晶文社.
村田宏（2012）「「バレエ・リュス」とロシア・アヴァンギャルド演劇」『跡見学園女子大学文学部紀要』47, 43-59.
Buckle, R. (1971) *Nijinsky*, Simon & Schuster.
― (1979) *Diaghilev*, Simon & Schuster. (鈴木晶訳（1983）『ディアギレフ ロシアバレエ団とその時代』(上下), リブロポート.)
Cohen, S. ed. (2004) *International Encyclopedia of Dance*, Oxford University Press.
Eksteins, M. (1990) *Rites of Spring: The Great War and the Birth of the Modern Age*, Black Swan. (金利光訳（1991)『春の祭典―第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』TBS ブリタニカ.
Garafola, L. (1998) *Diaghilev's Ballets Russes*, Oxford University Press.
Scheijen, S. (2010) *Diaghilev: A Life*, Profile Books. (鈴木晶訳（2012)『ディアギレフ　芸術に捧げた人生』みすず書房.)
Stravinsky, I. (1935) *Chroniques de ma vie*, denoël. (笠羽映子訳（2013)『私の人生の年代記 イゴール・ストラヴィンスキー自伝』未来社.)

さとう　まちこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

佐藤真知子さんは、バレエ史上最も偉大な芸術家の一人とされる、ヴァーツラフ・ニジンスキーに関する研究を行なっている。修士論文では、全 4 作品あるニジンスキー振付作品のうちの一つである《春の祭典》について、当時の評価と受容に着目した研究を行った。その研究で得た課題を踏まえて、博士論文にて、ニジンスキー自身の舞踊史上の位置づけを明らかにしようとするためには、振付家自身の活動、並びに作品に関わる一次資料の検討が必要不可欠である。

今回の資料収集を目的とする海外調査研究は、博士論文の基盤となる大変重要な調査であった。調査は、10 日間という短期間に、ボストンとニューヨークの 2 都市をまわるというものであった。この限られた時間の中で、ニジンスキーの手記の原典をはじめとする、多くの貴重な資料の収集をなし得たことは、博士論文の執筆に関して非常に有益な収穫であったと言えよう。さらにこの研究を進め、深化させることを期待している。

（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科（人文科学系）・猪崎　弥生）

Acquisition of materials on Vaslav Nijinsky and his productions

Machiko SATO

The aim of this short trip was the acquisition of materials on Nijinsky and his productions.

Vaslav Nijinsky [1889-1950] is a Russian dancer and choreographer in the 20th century, and he was known as a member of Diaghilev's Ballets Russes. He choreographed four ballets: *L'Après-midi d'un Faune* (1912), *Jeux* (1913), *Le Sacre du printemps* (1913) and *Till Eulenspiegel* (1916). His choreographies were criticized and evaluated as controversial works. However, his view on dance has not been researched yet. In order to investigate his view on dance, I collected materials on Nijinsky and his works industry.

I visited Houghton Library at Harvard University in Boston and Performing Arts Center of New York Public Library in New York. Based on these materials, I would like to clarify Nijinsky's theory of dance and his contribution to the development of choreography and ballet culture today.